

六 ブーゲンビル島（八重山陣地）

二十年六月、ブーゲンビル島に転進した第一大隊は、八重山の南側斜面、敵に向かった最前線に布陣する事になった。今迄ショートランド島の警備を担当して、敵の姿を見たことが無かった我々が、今度は一步も退くことが許されぬ陣地の真前に押し出されたのであった。

転進の第一夜、大隊本部は谷の急斜面にある空小屋に辿り着き、其処が本部位置となった。

屋間ならまだしも、夜間見知らぬ密林の中の最前線は不気味である。勿論、灯火は許されないで、椰子の木の繊維で作った火縄で足下を確かめる状態であった。

その夜奇妙な出来事があった。

疲れ果てて半死半生の体で新陣地に着き、食事を終えてぼっとした頃合だった。大隊長が急に将校、下士官全員を集めて命令した。

「到着後の混乱の間に、机の上に置いておいた連隊本部命令書が無くなっている。恐らく敵のスパイの仕業と思われるので、急遽兵を率いて周辺を搜索せよ」

危険な暗闇の傾斜地を、這うようにして搜索を行ったが異常が無い。一時間程で打ち切られたが、副官は密かに私の耳元で「大隊長の芝居に違い無い」と囁いた。

最前線に布陣して、兵達に警戒心を植えつけようとしたものか、或いは大隊長自身身辺の不安から周辺の安全を確かめようとしたのかよく判らない。

翌朝、大隊長から南海第四守備隊の編成替えが伝えられた。

同時に私は大隊本部を離れ、第一中隊の小隊長となり、即日第一大隊前哨陣地の機関銃陣地に就くように命じられた。そして各中隊から抽出された兵約二十名が私の部下に配属された。

敵の攻撃に際して真先に全滅するのは明らかであるが、その陣地に就くことに対する恐怖心は

それほど感じ無かった。

大隊長に挨拶の申告をしたが、複雑な心境だった。思えば内地以来行を共にしてきて随分私を悩ましてきた大隊長なので、ほっとした気持ちもあった。しかし明日も判らぬ戦地での苦労は誰も同じであり、大隊長自身も明け暮れ私以上に悩んでいた事には間違いないだろうと思ひながら申告した。

夜になって前哨陣地への移動を開始したが、殆ど敵中に入って行く状況であるので立って歩くことも話すことも許されない。約二十人が一本の綱に結ばれて密林中を匍匐して進み、綱を引く事によって「進め」「止まれ」と意志を伝えるのである。途中で谷川があったが、発見され易いので倒木にへばり付くようにして這って渡った。

陣地には他部隊の小隊が交替を待っていたが、その小隊長は陣地前面の敵状を詳しく説明した後、機関銃だけを残り隊員を連れて後方に引き上げて行った。

陣地は連絡壕が縦横に掘られており、その先端に機関銃座がある。そしてその機関銃は、夜間敵が攻めて来ると判断される方向に向けて固定して据えつけ、暗闇でも射撃出来るようになっていた。また連絡壕の所々に機関銃手以外の兵が小銃で狙撃出来るように銃座が設けられていた。

小隊長の指揮所は連絡壕の後端にあって、半地下式に作られており、草木によって完全に偽装されていた。

交替した小隊長の話によれば、陣地前方で双方の斥候兵が衝突して射撃し合う音が屢聞こえるという緊迫した情勢になっているらしい。

敵が攻撃して来ればあっと云う間に玉砕するかもしれない小陣地ではあるが、前哨陣地の任務は、敵の攻撃を逸早く発見して本隊に知らせると共に、一秒でも長く抵抗し後方部隊に戦闘体制を採らせる時間を稼ぐ事にあるので、瞬時も油断出来ない。昼夜共銃座を離れる事なく、夜間は半数交替で壕の中でまどろむ有様であった。

なお、その時の小隊長の話では、斥候の遭遇戦では日本の斥候が絶対に強いらしい。豪軍側は自動小銃を持っていて不意の遭遇には立ったまま乱射してくる。それに対して日本側は単発小銃しか持っていないから素早く物陰に身を隠して狙撃する。ジャングル内だけに有利だそう。又煙草に飢えている日本兵は香料の強い豪州煙草に敏感で、豪州兵の近接を感じ取ることが出来るらしい。

何時まで続くか判らぬ激務であったが、食事だけは心配しなくてもよかった。

三四日目毎に後方から食料が届けられ、しかも炊煙を上げる事が出来ないので戦闘中の非常食としての圧搾口糧が送られてくるので兵達は喜び且つ驚いていた。

陣地前の緊迫した情勢をひしひしと感じられたが、敵兵が現れる事も無く約一ヶ月が過ぎた。苦しいけれども慣れてきたある日、突然交替部隊が着いた。

命令を受けた時、大隊長は期間を言わなかったので知らなかったが、この昼夜の別も無い前哨陣地の任務は一月交替に定められていたらしい。交替時まで緊張を緩めさせない為の配慮なのか冷淡なのか、何時もながら気心の判らぬ大隊長である。

第一中隊への配属替えも、戦闘部隊として陣地に就くための処置であつたので、任務が終わると再び大隊本部に帰り、二十人の部下もそれぞれ元の各中隊に戻って行った。

しかし直ぐにまた別の命令を受けた。

更に重要且つ困難な任務だった。今度は、大隊長の指示も大変行き届いたものであり、しかも其の重大任務に就く私に対して激励と感謝の気持ち溢れていた。

「小林少尉には部隊編成以来非常に苦勞をかけてきたが、さらに困難な任務を果たしてもらう事になった。第十七軍からの命令で、敵の根拠地タロキナへ陸軍側と海軍側と各一組づつ将校斥候を出す事になった。任務の内容は、タロキナ陣地の敵兵力、装備の偵察と八重山陣地攻撃の時期兵力の判断材料の収集だ。既に今迄数組の将校斥候が出されているが、残念ながら一組も戻って

来ていない。敵の警戒網が相当厳しく、その上陣地周辺は夥しく地雷が敷設されているらしい。生還は期し難い極めて困難な任務だ。出発は二十日後の八月十八日、隊員は各中隊から選抜した優秀な下士官五名を付けるから二十日の間によく訓練しておくように、特に充分に体力をつけて出発するのが大事だ。出来る事なら任務を果たして生還してくれ」

緊張して大隊長の命令を受けたが、任務の困難さ危険さに就いてはさほど動じなかった。

宇品港を出港以来、既に幾度か危地を潜り抜け、多くの困難な任務にも耐えて来たので今さら驚くことは無い。それに斥候に出ようが出まいが、遅かれ早かれ行き付く運命に変わりが無いと云う諦観があった。

私を含めて六人の要員は大隊本部から百メートル程離れた所の別棟に起居して、種々具体的な方策を練った。五名の下士官は皆戦歴を持ち経験豊富な者ばかりであって、極めて心強い。地雷の発見法の練習だとか、敵中で無言のまま意志を伝え合う手話の打ち合わせ等を行ったが、他に訓練する事はそう多く無かった。むしろ大隊長の言葉通り体力の強化に努めたり、お互いの気心を理解し合う事が大切だった。

そうして我々が出発前、困難を前にしてはいるが若干余裕のある日々を送っているのに対して大隊本部の方は、予想通り病人が続出、死者が相次ぐ悲惨な有様であり副官が屢我々の所に来て困り果てた顔をし、「俺も連れて行ってくれ」と愚痴っていた。

その頃軍から妙な通達が二つ出された。内容は末期的状况を思わせるものであった。

一つは、捕虜になると人体実験に使用されて死ぬに勝る苦痛に合う事になるから、万一捕虜になるのが避け得られない事態になれば自殺するように心掛けよと云うものであり、もう一つは、最近土民の中で豪州軍に協力する者が増加しつつある傾向に対処し、土民に輕蔑される様な行動をしない事、特に土民と相撲を取ったり陰部を見せてはならないと云う変な通達であった。

緊迫した八重山陣地は壕を掘り廻らし掩蓋を組み、所々方々に銃座を築いて八重山そのものを

大要塞化しようとしていた。しかし兵の体力は極度に減退しており、気力だけが八重山を怪しく覆っているようであった。

そして豪州掃討軍は未だ現れないが、その軍靴の音戦車のキャタピラの響きが地鳴りとなって刻々近づきつつあるように感ずる日々であった。